



Data

監督：デレク・ツァン
 原作：玖月晞 オンライン小説『少年的你，如此美麗』
 脚本：ラム・ウィンサム／リー・ユアン／シュー・イーメン
 出演：チョウ・ドンユイ／イー・ヤンチェンシー／イン・ファン／ホアン・ジュエ／ウー・ユエ／ジョウ・イエ

👁️👁️ みどころ

中国に「高考」の制度があることは知っていたが、受験生が1000万人とは！日本の「共通一次試験」のマーク方式と、こんなにも違うとは！

いじめと搾取は資本主義特有の現象で、「欲するままに受け取る」理想的な共産主義社会では存在しないのかもしれないが、今の中国では？本作は『ソロモンの偽証 前篇・事件』（15年）と同じように女子高生の飛び降り自殺から始まるが、その原因はいじめ・・・？

『泥だらけの純情』（63年）は吉永小百合演じる令嬢と浜田光夫演じるチンピラとの純愛がテーマだったが、本作に登場するチンピラは“専属のボディガード役”を希望し、それに専念するが、それは一体なぜ？そこから生まれる2人の“魂の叫び”は如何に？クライマックスに向けて起きるいじめは凄惨なものだが、なぜそこまで？そこから起きる「女子高生殺害事件」の犯人は？刑事たちの捜査は？

『ソロモンの偽証』に見た校内裁判も興味深かったが、本作ではミステリー調の犯人探しと若い2人の“純愛”に注目しながら、「高考」を生き抜いたヒロインの成長をしっかり確認したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■中国の高考とは？そのものすごさにビックリ！■□■

私が1971年に司法試験を受けた頃は、受験生が約2万人で合格者が約500人、倍率40倍の厳しさだった。しかし“司法改革”の名の下で始めた法科大学院制度は私の予言どおり大失敗。その結果、2021年5月12日に全国7都市9会場で行われた司法試験の受験者は3424人。合格者は1500名弱だから、その倍率は約2.28倍という惨憺たる有り様だ。

大学の入試制度も、私が1967年に大阪大学法学部に合格した頃は、国立1期、国立2期、私立大学などの区別だったが、その後、①1979年から1989年までの間は、国公立大学の入学志望者を対象とした共通一次試験（大学共通第1次学力試験）が実施され、続いて、②1990年から2020年までの間は「大学入試センター試験」に変更され、マークシート方式による受験生の“振り分け”が定着した。そのレベルがどの程度かは“ゆとり教育”の問題点を含めて考える必要があるが、そんな日本と比べ、人口13億人の中国の大学入試制度はどうなっているの？

中国史が大好きな私は、中国には昔から“科挙”という超過酷な官吏登用試験制度があったことを知っている。そんな中国では、全国統一の大学入学試験として「高考」が1952年にはじめて実施された。その後、毛沢東が主導する文化大革命の方針により1966年から1976年まで中止されていたが、毛沢東が死去した翌年の1977年に再開された。その詳細はネット情報などで調べてもらいたい、驚くべきは毎年6月7日・8日に行われる「高考」の受験者数は約1000万人もいること。第2は、国語・数学・英語の各150点＋文理選択で、文科総合は歴史・地理・政治で、理科総合は物理・化学・生物の筆記試験であること。第3は国語は語文（現代文・古文・作文）で構成されるうえ、作文では自由な発想が尊重されることだ。こんな試験は受ける方も大変だが採点する方も大変だ。科挙の時代と違って、約900万人が合格し、そのうち450万人までが、四年制大学に合格、残りの450万人は三年制の「専門学校」扱いの学校に入れるそうだ。また、地域格差や地域逆格差、そして少数民族加点制度もあるから賛否はいろいろだが、とにかく春節の民族大移動が15万人という国にふさわしい、ものすごい規模の試験であることは間違いない。私の知っている若い中国人の友人諸君はみんなこの「高考」を経て一流大学に入り、そこからさらに日本語を習得して日本に留学し、日本で仕事についているのだから揃って優秀なのは当たり前。また、日本の若者が揃って彼らに負けるのも、ある意味当たり前？

■□■中国の学校にもいじめが？その深刻さは？対策は？■□■

私の小学生時代にも中高生時代にも、勉強の世界での“できる子”と“できない子”の区別とは別の、“強い者”による“弱い者”いじめの姿はあったが、今の日本に定着しているような「いじめ」という特別の概念はなかった。学校は勉強を学ぶ場だけでなく、集団生活の在り方なども学ぶ場だが、どうしても学業成績の良し悪しが優先するから、“ガキ大将”はもとより、運動はできても勉強ができないヤツは先生からは誉めてもらえないことになる。すると、授業中の教室という学校のメインの場で存在感を発揮することができないそれらの連中は・・・？そんな生徒たちが徒党を組んで、勉強だけは得意でいつも先生から褒めてもらっている生徒を懲らしめてやろうと思えば、一体どんな行動を？

理想的な共産主義国家では、誰もが「欲するままに受け取る」ことができるから、資本主義社会のような競争や搾取はない。したがって、そんな理想的な共産主義国家の学校で

はいじめもないはず。確かに理論的にはそうかもしれないが、それは中国共産党が一方独裁的に支配し、理想的な共産主義国家を作っている中国でも、現時点では無理らしい。その理想の実現は何百年も後になりそうだ。高校での「いじめ」をテーマにした本作を観ていると、それがはっきりと！

日本でも「いじめ」を巡ってはさまざまな法的対策が取られたが、中国でも近時は「校内いじめ防止法」等の法的対策が取られているらしい。ちなみに、ネット情報によると、姚逸葦の論文「いじめの対策と『学校の境界』」があり、そこでは、「中国大陸、台湾、日本のいじめ対策をめぐる比較研究」による詳しい分析があるので、興味のある人はご一読を！

■□■校内で飛び降り自殺が！その原因は「いじめ」？■□■

2020年6月30日に「香港国家安全法」が制定された香港は、今や“一国二制度”が崩壊し、政府も議会も中国（本土）の言いなり状態になっている。そんな中、香港の俳優エリック・ツァンの息子として当然のように俳優となったうえ、『七月と安生』（16年）等で監督としても高く評価されている曾國祥（デレク・ツァン）は本作で、中国内陸部の都市の学校を舞台に、いじめ問題に真正面から切り込んだ。

本作は、女子高生・胡曉蝶（フー・シアオディエ）（張芸凡）が校舎のバルコニーから飛び降り自殺をするシークエンスから始まる。これは、宮部みゆきの原作を成島出監督が映画化した『ソロモンの偽証 前篇・事件』（15年）と同じだ（『シネマ36』95頁）。同作では、その第1発見者が2年A組のクラス委員を務める藤野涼子演じる優等生のヒロインだったが、本作では張芸謀（チャン・イーモウ）監督の『サンザシの樹の下で』（10年）（『シネマ34』204頁）でデビューした周冬雨（チョウ・ドンユイ）演じる陳念（チェン・ニエン）がヒロイン。チェンはフーの友人だったこともあって、その死体にチェンが着ていたジャージを掛けてやったため、一躍注目されてしまう存在になることに。チェンはフーと一緒に給食を配ったりしていたが、特に仲が良かったわけでもない。そのため、学校からそして警察からその死亡を巡る事情（他殺？自殺？）を聞かれても何も答えられなかったが、全校の先生や生徒が注目する中で、あんな目立った行動をしていいの？ひょっとしてフーの死亡の原因がいじめだったら、次の標的がチェンに向かってくるのでは？

■□■ひたすら勉強！その目的は？家庭環境は？■□■

本作の本編は、白いブラウスに薄青色のジャンパースカートの制服を着たチェンの姿が中心だが、導入部では英語の教師として生徒たちに発音を教えているチェンの姿が登場する。これを観ていると、なるほど、「高考」のためにあれほど厳しい勉強をしていただけのことはあり！と感心させられるが、「高考」受験後、チェンはどんなコースを経て教師の地位に？フーの飛び降り自殺（？）が起きたのは、「高考」の少し前。いじめ集団のボスは美人だがワガママなお金持ちのお嬢様の魏萊（ウェイ・ライ）（周也（ジョウ・イエ））。それにべったり付き従うのが、罗婷（劉然）と徐渺（張歆怡）の2人だ。

それに対して、チェンには父親がおらず、母親の周蕾（ジョウ・レイ）（吳越（ウー・ユエ））と2人暮らしだが、その母親も大きな借金を抱える中、チェンの学費を稼ぐため出稼ぎに出かけていた。その仕事は美容パックを売っているようだが、先日チェンが交わした電話では、客から「肌が荒れた」とクレームがついているというから、なにやら怪しげだ。そんなチェンの貧乏生活ぶりはすでにバッチリ、ウェイたちの情報に入っているらしい。ウェイはいじめグループのリーダーながら成績も優秀だから、親からは当然一流大学に入るものと期待されていた。そんなウェイからすれば、あんな貧乏な母親1人娘1人のチェンに、学校の成績や「高考」入試で負けるわけにはいかないのは当然。そう思うと、必然的にフー亡き後、次のいじめの標的はチェンに・・・？

『サンザシの樹の下で』では、高校3年生のずぶの素人だったにもかかわらず、突然「イーモウ・ガール」として主役に抜擢されたチョウ・ドンユイが、本作では「高考」の受験を控えた高校3年生・チェンの複雑な内面を表現力豊かに演じているので、それに注目！ちなみに、『サンザシの樹の下で』から約10年、必然的に少し老けたはずだが、それでもセーラー服姿ならぬ白いブラウスに薄青色のジャンパースカートの制服姿がピッタリ決まっていることに改めてビックリ！

■□■なぜこんなチンピラと？『泥だらけの純情』を彷彿！■□■

私が高高校時代に観ていた邦画は「青春モノ」が多かった。そこには大映の姿美千子や高田美和、東宝の星由里子等がいたが、やはりセーラー服姿の女子高生を演じさせれば、日活の吉永小百合と和泉雅子がピカイチだった。それに比べると『ソロモンの偽証 前篇・事件』での藤野涼子は？そして、本作でのチョウ・ドンユイは？

それはともかく、日活青春映画で吉永小百合の“お相手”を務めた浜田光夫は、高橋英樹と違って演技達人だったから、『愛と死をみつめて』（64年）のような深刻な「純愛モノ」から、藤原審爾の原作を中平康監督が映画化した『泥だらけの純情』（63年）でのチンピラ役まで幅広い役をうまくこなしていた。しかして、範疇から言えば「学園モノ」、テーマ別で言えば「いじめモノ」たる本作に、なぜかチンピラの刘北山（リウ・ベイサン）（＝小北（シャオベイ））（易烜千璽（イー・ヤンチェンシー））が準主役として登場するので、それにも注目！

もちろん、受験勉強一本槍の生活を続けているチェンに、シャオベイのようなチンピラの友人がいるはずはないから、シャオベイがチェンと知り合ったのは、チェンがいじめられている（暴行されている）現場に偶然出くわしたシャオベイが、スマホで警察に連絡しようとしたところを見つけれられたためだ。そのとばっちりでも、チェンも金を取られ、スマホを壊されたうえ、無理やりシャオベイとキスまでさせられたから、この2人の出会いは最悪。しかし、その後チェンがウェイ達による執拗ないじめに遭っていることを知ったシャオベイは？いじめられっ子同士が気が合った、というのはあまりに安易すぎる表現。『泥だらけの純情』は、吉永小百合扮する富豪令嬢が、新宿の盛り場で知り合った浜田光夫扮

するチンピラ青年と身分違いの純愛に陥っていく姿を感動的に描いていたが、本作中盤では、デレク・ツァン監督が描く、チェンとシャオベイの“魂の叫び”のような“生態”と“純愛”をしっかりと受け止めた。

■□■学校の調査は？警察の捜査は？チェンへのいじめは？■□■

『ソロモンの偽証 前篇・事件』、『ソロモンの偽証 後篇・裁判』は学校内でのいじめがテーマだが、宮部みゆきの推理小説が原作だから、自殺か他殺か？他殺だったら誰が犯人か？というミステリー色が強かった。そのため必然的に警察の出番があったが、同作後半は“校内裁判”という面白い設定になっていた。それに対して、本作導入部で見るフーの死亡は自殺の可能性が高いから、その処理は本来学校の調査が進めるべきで、警察の捜査が入る余地は少ないはず。ところが、意外にも本作では、若い刑事のヂョン・イー（イン・ファン）が、いじめを受けているチェンを救うべく奮闘をする中で“第3の主演”のような立場になっていくので、それに注目！相棒となる先輩刑事ラオヤン（ホアン・ジュエ）はそんなヂョンをある意味冷ややかに見つめていたが、さて、ヂョンはウェイたちによるチェンへのいじめをどこまで捜査するの？

そう思っていると、「高考」の受験日が近づいたある日、チェンはウェイをリーダーとする3人からひどいいじめを受けることになるが、その程度はハンパないのでそれに注目！ここらあたりが中国や韓国映画のすごいところで、邦画ではとてもとても……。そんな惨状に陥ったチェンと、前からずっとどうしようもない状態にあったシャオベイとの間に“心の交流”が芽生えたのも当然。『泥だらけの純情』の場合はそれが令嬢とチンピラとの純愛という形で進展していったが、本作のシャオベイはチェンの“専属ガードマン”の役割を選択し、チェンもそれを受け入れるという珍しいパターンになるので、それに注目！

もともと、シャオベイは特定の職業についているわけでもなく、特定の組織に入っているわけでもないから、24時間フリー。それならストーカーのように、24時間チェンの後ろに付き添ってチェンを見守ることも可能ということだ。それはそれで奇妙なスタイルながらも、2人の今あるべき人間関係（男女関係）としてうまく機能していくかに思えたが、あの凄惨ないじめを救えなかった現実を正視すると？そこにおけるシャオベイの責任は？シャオベイの自己嫌悪は？その報復の矛先は？

■□■凄惨な女子高生殺害事件が勃発！その犯人は？捜査は？■□■

本作ではヒロインのチェンも、もう1人の主人公となるシャオベイも、一般的によく見られる性格ではなく、かなり極端な性格の持ち主だ。さらに、“第3の主演”と言ってもいい若い刑事のヂョンも、熱心さは認めるものの、普通の優等生タイプの刑事ではない。

それに対して、いじめグループのリーダーであるウェイは、学業成績も優秀な大富豪のお嬢様だけに、わがままだが性格はわかりやすい。彼女にとって、いじめグループのボスとしての活動は勉学の合間のレクリエーション活動（息抜き活動）だったから、そのターゲットだったフーが飛び降り自殺でいなくなってしまうと、次のターゲットを探さなければ

ばお楽しみタイムがなくなってしまう。そんな、ウェイにとっては、フーの遺体の前で目立った行動をとったチェンが次のターゲットになっただけのことだが、想定外だったのはチェンの“専属ガードマン”としてシャオベイが付きまとうようになったこと。ウェイにしてみれば、なぜ2人がそんなに強く結びつくのかは全く理解できなかったはずだ。

もう1つ意外だったのは、予想以上にチェンがしぶとく、なかなか謝罪しないから少し不気味であるうえ、その“専属ガードマン”であるシャオベイも更にその上に行く不気味さを持っていたこと。ならば、ウェイも「考高」の受験を控えているのだから、チェンのいじめを休止すればいいのだが、チェンの態度を見ていると余計ムカついてくるらしい。もっとも、現在パレスチナ自治区のガザ地区をめぐる展開中の、イスラエルとパレスチナ（イスラエル原理主義組織ハマス）との軍事衝突について、イスラエルのメディアが5月18日に「20日 停戦合意か」と伝えたように、スクリーン上では、予想以上の反撃を受けたウェイがチェンに対して“停戦合意”を求めるシークエンスが登場するので、それに注目！そんな“謝罪”を受けてチェンはどうするの？他方、今やチェンの苦しみにとことん同意しているシャオベイは、どうするの？また、当初はチェンのいじめを防止しようとしていただけの刑事・デオンは、今やどう考え、どういう権限で問題の解決に向かっていくの？

本作クライマックスの「女子高生殺害事件」を巡る捜査と人間模様は、第3の女性刑事、王立（謝欣桐）も登場させながら、目まぐるしい展開が続いていくので、それはあなた自身の目でしっかりと！そのうえで、チェンの「考高」の可否は？そして、「女子高生殺害事件」の犯人の処置は？それもあなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年5月21日記